



Data

監督：ジョー・バリンジャー
 脚本：マイケル・ワーウィー
 原作：エリザベス・クレプファー
 『The Phantom Prince: My Life With Ted Bundy』
 出演：ザック・エフロン／リリー・コリンズ／カヤ・スコデラー
 リオ／ジェフリー・ドノヴァン／アンジェラ・サラフィア
 ン／ディラン・ベイカー／ブライアン・ジェラティ／ジョン・マルコヴィッチ

👁️👁️ みどころ

アメリカ史上最も凶悪な連続殺人犯テッド・バンディとは？被害者は30名以上の女性、美しい容姿、3度の死刑判決の男、とは？

同監督の同じテーマでのドキュメンタリー映画はテッドの凶悪ぶりが顕著だったそうだが、逆に本作ではテッドの自信過剰ぶりと善人ぶりが顕著。最愛の恋人には裏切られたものの、新たに獄中結婚（法廷結婚？）する女性まで登場するから、後半は彼女の奮闘にも注目！

裁判の有罪、無罪は証拠に基づく認定。それが鉄則だが、さて、陪審員たちによるテッドの評決は？TVカメラが入る公開裁判になったのは一体なぜ？自ら弁護人になったテッドの尋問は？そして、陪審員の評決は？

それにしても、もし万一本件が冤罪だったとしたら・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■法学部生は必見！私も本作ではじめてこの男を勉強！■□■

2019年3月1日付で念願の『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』を出版した私は、アメリカの法廷モノ映画は大体知っていると思っていた。ところが、「アメリカで最も有名な伝説の殺人鬼」「最強の連続殺人者」等と呼ばれているテッド・バンディのことはまったく知らなかった。彼は「アメリカ史上最も凶悪な連続殺人犯」として知られており、その犯罪記録はたくさん残っているそうだから、ただただ私の無知を恥じ入るばかり・・・。

パンフレットにある「DIRECTOR INTERVIEW」によれば、本作を監督したジョー・バリンジャー監督は20年以上にわたって、ノンフィクション映画やテレビの世界で中心

的な役割を担ってきたらしい。そんな彼は既に、『殺人鬼との対談：テッド・バンディの場合』（19年・Netflix 配信）で、死刑囚監房での録音テープや事件当時の記録映像、関係者と本人の独占インタビュー等を通して、その素顔に迫っているようだ。

そんな風に、これまでも悪名高い殺人犯を取り上げた映画やドキュメンタリーや著書があるのに、なぜバリンジャー監督は再度本作で同じ主題を取り上げたの？その答えは、「DIRECTOR INTERVIEW」の中で詳しく書かれているので、それは必読！

■□冒頭の幸せぶりは一体ナニ？原作は？■□

本作冒頭は、夫と離婚してワシントン州シアトルに転居し、今は一人娘モリーと共に暮らすシングルマザーのリズ（リリー・コリンズ）が、一目会ったその日からテッド・バンディ（ザック・エフロン）と恋に落ち、幸せな同棲生活に入るストーリーが描かれる。しかし、これって一体ナニ？このハンサムで女性に優しい男テッドが、アメリカ史上最も凶悪な連続殺人犯？そんなバカな？本作を観れば、誰でもそう思うはずだ。

他方、この女性リズこそが、本作の原作となった『The Phantom Prince: My Life With Ted Bundy』の著者だということからビックリ！1981年に出版された同書では、エリザベス・クレプファーはテッド・バンディとの緊張感に満ちた波乱の6年間を回顧しているらしい。また、2020年1月に出版された新装版では、著者がテッドと同棲していた時に、彼を父親のように慕っていた娘のモリーにより、これまで明かされていなかった新たな事実が描かれているようだ。

しかして、前述の質問に対するバリンジャー監督の答えは、「マイケル・ワーウィーの優れた脚本にある」らしい。なるほど、なるほど・・・。

■□私の節目と同じ1969年、1974年、1979年に！■□

私は去る12月2日に東京で開催された東京の五十嵐敬喜弁護士が代表を務めている現代総有研究所主催の「虎ノ門ヒルズエキスカージョンと坂和弁護士とのトークセッション」に参加したが、そこで配布したのが「坂和年表2019—70歳の年表から何を？」。これは、1949年に生まれ、2019年に70歳になった私が、1969年（20歳）、1979年、1989年（40歳）、1999年、2009年（60歳）という10年、20年ごとの私の歴史と、都市計画法の歴史、国内外の歴史を対比させたもの。そこではまた、映画等との対比も含ませていた。そんな年表の中で、とりわけ1969年は、旧都市計画法制定から100年、近代都市法制定から50年の節目となった年。そしてまた、『男はつらいよ』のシリーズ第1作が公開された年であると共に、私が学生運動から縁を切り、司法試験勉強に切り替えた年。そんな1969年は私が20歳になった年であり、今からちょうど50年前の年だ。

他方、私が弁護士登録したのは1974年、独立したのは1979年だが、シアトルで

女性の誘拐事件が発生したのが1974年、そして、フロリダ州で初の公開裁判が開廷したのが1979年7月8日だから、偶然私の節目の年と一致している。そんなことは本作の鑑賞にはまったく関係ないことだが、1969年から司法試験を目指した私には、最愛の女性リズやその可愛い一人娘モリーと離れ、1人でユタ州のロースクールに入って勉強しているテッドの1975年の姿は他人ゴトとは思えない。幸いにも私は1972年10月に司法試験に合格し、1974年4月に弁護士登録できたが、今、信号無視で警察官に止められたテッドは、それだけなら軽微な交通違反で済んだはず。ところが、車の後部座席に怪しげな道具袋を積んでいたから、アレレ……。そして、その前年の1974年にシアトルで発生した女性の誘拐事件の容疑者にテッドが以ていたそうだから、さらにアレレ……。しかし、1976年2月23日には、ソルトレイク郡の裁判所でテッドを被告人とする誘拐未遂の裁判が始まったが……。

■□■この自信はナニ？リズの苦悩は？最初の裁判は？■□■

前述の通り、本作冒頭、ワシントン州シアトルのカレッジバーで1人で飲んでいるテッドが、親友と共にそこに来ていたリズに声を掛けるシークエンスが描かれるが、それを見ている限り、テッドは実にいい男。ユタ州のロースクールの図書館で勉強しているテッドの姿も、真面目なロースクール生そのものだ。そんなテッドのしゃべり方は当然ながら理路整然としているうえ、自信タップリだ。したがって、1974年にシアトルで起きた女性の誘拐事件で目撃された犯人らしき男の車がテッドの愛車と同じくフォルクスワーゲンだ、とか、新聞に公表された似顔絵はテッドの顔によく似ていた、等と言われても、「それだけで俺を犯人と決めつけるのはナンセンス！」。テッドがそう反論したのは当然だ。

突然の事態にリズは大混乱だが、テッドは反論に自信タップリ。法廷で汚名をそそぐと宣言したが、ホントに大丈夫？弁護士との打ち合わせは何となく心許ないし、法廷の風景を見ていると、テッドの自信タップリさは自信過剰気味に見えてしまうが……。そう思っていると案の定、テッドの最初の裁判はテッドの予想に反して有罪。テッドの予想は見事に外れてしまうことに。一度こんな裁判を経験したら、普通の人間なら自信を失って落ち込み、何とか再生を目指そうと努力するはずだが、さてテッドは……？

本作には続いて、コロラド州で起きた別の未解決事件の犯人としてテッドを疑っている刑事フィッシャー（テリー・キニー）が、テッドに対して「コロラド州に行ったことは？」と質問するシーンが登場する。そこでテッドは、「行ったことはない」と答えたが、それは真っ赤なウソだったらしい。そのため、その直後に面会に来た弁護士は、血相を変えながらテッドを怒りつけたうえ、弁護人を辞任してしまうことに。さらに、コロラド州のアスペンの裁判所に移送されたテッドは、何と休廷中に看守の隙を見て脱走してしまったから、アレレ……。スクリーンを観ていると、テッドはいかにも気楽かつスマートに脱走しているかに見えるが、これはあまりに軽率すぎるのでは？ちなみに、テッドの希望のシンボ

ルは、脱獄に執念を燃やす男の生きザマを描いた小説『パピヨン』だったが、それは一体なぜ？

■□■広域にわたる凶悪犯の摘発に、「合衆国」は弊害？■□■

日本は明治維新によって、それまでの幕藩体制から天皇を中心とする中央集権国家に移行したため、警察はすべて国家が一元的に統治、管理することになった。しかし、州が連合することによって成り立っているアメリカ合衆国では、警察も州ごとに統治、管理されていた。そのため、犯人がその警察の管轄を越えて移動してしまうと追跡が困難になってしまうという制度上の欠陥があり、現実にもアメリカの警察は、殺人を繰り返しながら移動する犯人に対してはうまく対処することができていなかったらしい。

パンフレットにある越智啓太氏の『テッド・バンディ：最強の連続殺人者』には、そのように解説されている。そのため、「テッド・バンディの事件においても、ワシントン州、ユタ州、コロラド州といった異なった州で発生した同種の事件が同一人物によるものだ」ということがわかり、結びつけられるまでにはある程度の時間を要した。もし、これらの関係がもう少し早くわかっていたならば、より早く検挙できていた可能性があるといわれている」そうだ。さらに、「バンディ事件後には、各地の警察組織が情報を共有しあい、分析官がその情報を分析統合し、類似の手口の犯人が異なった地域で活動していないかを調査するというシステムが作られた。これが、凶悪殺人犯追跡プログラム（VICAP）と言われるものである。また、VICAPのための分析手法として作られたのが、いわゆるプロファイリングである。テッド・バンディ事件はプロファイリングを作り出した重要な契機の一つとなったのである。」と解説されている。

そんなテッドの逮捕と起訴に執念を燃やしたのは、フロリダ州のカツァリス保安官（ケヴィン・マクラッチー）。「ゲームは終わりだ、テッド」、「ワシントン州は君を見送ごし、ユタは手放し、コロラドは逃がした。私は仕留める」と宣言した彼は、フロリダ州で起きた女子大生2人の殺害容疑でテッドを逮捕し、フロリダ州での裁判が始まったが、何とこれは史上初の公開裁判に！つまり、法廷にはTVカメラが入り、今や全米一の指名手配犯となった男の運命を巡る、全国でテレビ中継される歴史上はじめての裁判になったわけだが、それは一体なぜ？

■□■フロリダで異例の公開裁判が！弁護団は？裁判官は？■□■

今年8月12日に観た小林正樹監督の『東京裁判』（83年）は実に見応えのある骨太の作品だった（『シネマ45』52頁）。同作は4時間37分の長尺だったが、ホンモノの東京裁判は2年余の審理を要したうえ、そこにはカメラや新聞記者が入る公開裁判だった。また、『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）や、『否定と肯定』（16年）（『シネマ41』214頁）、『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』（15年）（『シネマ38』150

頁)で観た「アイヒマン裁判」も公開裁判だった。しかし、いくら凶悪犯とはいえ、なぜテッドを被告人とするフロリダ州における女子大生2人の殺人事件が公開裁判にされたの？

その根拠は、弁護士の私にもサッパリわからないが、本作ではじめて見る殺人事件の公開裁判は非常に興味深い。TVカメラの前に検察官は大張切りで、陪審員たちに本件の悪質性を詳細に解説。テッド側には異例の大型弁護団が就いたが、これはすべて国選弁護だった。しかし、ソルトレイク郡の裁判所でテッドがはじめて受けた裁判で、テッドと弁護人が折り合わなかったことを考えると、今回も何か問題を起こすのでは？また、アメリカの法廷モノでは裁判官の訴訟指揮がポイントになることが多いが、本件を担当するエドワード・カワート判事(ジョン・マルコヴィッチ)は、どんな人物？そして、どんな訴訟指揮を？ひょっとして、最初からテッドに対して予断と偏見を持っているとヤバイが、さて・・・？

ハリウッドの法廷モノで圧倒的な法廷技術を見せてくれた映画が『コネクション マフィアたちの法廷』(06年)、『シネマ29』172頁)、『リンカーン弁護士』(11年)、『シネマ29』178頁)、『砂上の法廷』(16年)、『シネマ38』31頁)等だが、本作では寄せ集めの国選弁護団を差し置いて、共同弁護人になったテッドが自ら証人に対して反対尋問する姿が興味深い。その出しゃばった態度にカワート判事は時々注意をしていたが、テッドの尋問はそれなりに的確なものも多い。検察側が有罪の決め手としたのは、被害者の尻に残っていた犯人の歯型。それがテッドのものと一致したという鑑定証人に対するテッドの反対尋問は？

日本の刑事法廷では、拘留中の被告人は手錠こそ外されるものの、つっかけ履きとジャージ姿が多いから、テレビ映りは決してよくない。しかし、本作に見るテッドはパリッとしたスーツ、ネクタイ姿でキメていたから、カワート判事のお褒めに預かったほど。もともとイケメン男のテッドが、ファッションもキメたうえ、法廷では弁護士顔負けのカッコイイ尋問(パフォーマンス?)を続けたから、法廷傍聴に来ていた若い女性たちはたちまちテッドのファンに。そんな推移の中、裁判の行方はどうなるの？テッドは今、有利なの？それとも不利なの？

■□■「獄中結婚」ならぬ、公開の「法廷結婚」に唖然！■□■

現在もお歌手として第一線で活躍している加藤登紀子の夫・藤本敏夫は、1960年代の学生運動のリーダーとして有名な男。この2人が1972年5月6日に「獄中結婚」したのは有名な話だ。日本では、結婚は婚姻届を提出し、受理されることによって成立するが、アメリカは？私はアメリカも日本と同じ届出主義と思っていたが、本作で観た公開法廷での「法廷結婚」(?)の成立を見ると、はじめてそうではないことを知ることに・・・。

相次ぐ証言と証拠を見ていると、テッドが次第に追いつめられていることは明らかだが、

テッドはあくまで強気。そのテッドが最後の切り札証人として登場させたのがキャロル・アン・ブーン（カヤ・スコデラーリオ）。テッドが愛していたのはあくまでリズだが、リズがテッドへの愛と不信の葛藤に苦しむ中、新たにテッドの「恋人」兼「親身のサポート役」として登場してきたのが、ある時、あるところで再会した（？）旧知の女性キャロルだ。リズはテッドの裁判に関しては何の支えにもならず、ただテッドの恋人という存在だったのに対し、キャロルはテッドの無罪（冤罪）を積極的にアピールする社会運動家としての能力とエネルギーを持っていたから、テッドにとっては心強い味方だ。もっとも、そんな女性キャロルが、法廷で一体何の証言を？

そう思っていると、いくつかの質問の後にテッドがキャロルに質問したのは、「結婚を申し込んだら承諾してくれるか？」というもの。こんな質問に検事が異議を述べたのは当然だが、キャロルの答えは「YES」。そして、テッドの説明によると、アメリカでは、結婚の申し込みと承諾が公になされると、届け出がなくとも成立するようだ。しかし、テッドは一体何を狙ってそんな質問（パフォーマンス）を？そして、その効果は？この成り行きは、法学部生や弁護士は必見だ。

■□■本作の出来は？評価は？賛否は？■□■

本作のチラシには、「極めて邪悪、衝撃的に凶悪で卑劣」「アメリカ史上最も凶悪な連続殺人犯 テッド・バンディ」という大きな文字が躍っている。それに続いて、「IQ 160の頭脳」「獄中結婚」「シリアル・キラーの語源」「2度の脱獄」「雄弁な振る舞い」「被害者は30人以上の女性」「美しい容姿」「3度の死刑判決」の見出しもある。そんな本作は、法学部生や弁護士は必見だが、キネマ旬報1月上・下旬合併号レビューにおける3人の評価は星3つ、2つ、3つだから、低い。

ただ、その文章を読んでいると、どうもそれはバリンジャー監督のドキュメンタリー全4回と対比すると甘さが目立つためだと考えられる。それは、例えば「T・バンディのどの時間を切り取り、どの側面に光を当てるかの取捨が顕著で、ある意味特異な作品だ。」の文章でも明白だが、確かに本作を観ている限り、チラシの見出しほどテッドの凶悪性は感じられず、むしろテッドの高感度のアップを強調している感すらある。これは、テッドのハンサムぶりや、法廷での弁護人としての活躍のカッコ良さにウェイトを置いた（置きすぎた）ためだが、なぜバリンジャー監督は敢えてそんな演出を？私は彼のドキュメンタリー全4回を観ていないから何とも言えないが、当然彼としては、「DIRECTOR INTERVIEW」にあるように、同じテッドを主題にした映画を作るのなら、ドキュメンタリー全4回とは全く違うものを作りたいと考えたのは当然。したがって、本作は本作で十分成立するし、興味深くつくられた「法廷モノ」の傑作と言えるのでは？

ちなみに、日本では戦後すぐに起きた「松川事件」や「三鷹事件」をはじめとする冤罪事件が次々と再審無罪になっていった。2009年に再審無罪とされた、1990年に発

生した「足利事件」もその例だ。そんな目で本作を鑑賞し、最後まで冤罪だと言いつづけた
テッドの主張が万が一正しかったとすれば・・・？そんな可能性も含めて、本作は必見！

2020（令和2）年1月4日記